

森のようちえんを通じた森づくり

苫東・和みの森運営協議会

目次

はじめに	2
第1章 森のようちえんとは	3
(1) 世界の森のようちえん 日本の森のようちえん	3
(2) 日本の森のようちえんの特徴	4
(3) なぜ森（自然）なのか	6
その1 森の捉え方～自然はどういう環境か～	6
その2 森の活動で育つもの	8
～自然特有の体験（感性的体験と冒険的体験）～	
その3 自然と共に生きる	13
(4) これからの時代と森のようちえんの役割	15
第2章 そこで子どもとどう関わるか	16
(1) 子どもの何を育むのか	16
(2) 子どもの姿	17
(3) 森のようちえん的な関わり	17
その1 指導者のあり方について～子どもが持っている力を信じる～	17
その2 子どもの育ちや姿に合わせた関わり	18
～子どもの主体性を引き出す環境づくり～	
その3 子ども主体の活動と体験を基軸にした活動	19
～子どものやりたいことを尊重する関わり～	
第3章 森のようちえんを実施するための計画と準備	20
(1) 森のようちえんを展開する自然環境の利用	20
(2) 地域との関わり	20
(3) 森のようちえんと安全管理	21
(4) 保護者対応	26
第4章 森のようちえんを通した森づくり	28
(1) その背景	28
(2) 目的ではなく、「手段」として考えてみる	29
(3) 子どもも、森の良くなる活動事例	31
(4) その効果が生み出した「次」	41

はじめに

第58回全国植樹祭開催跡地「苫東・和みの森」では、植樹祭の大きな目標である「国民参加の森づくり」を具体化すべく、「森のようちえん」という活動を森づくりの中心に据えて森林整備を進めることにしました。

当時は「幼児が森の中に入るなんて、危険極まりない」と言われていた時代です。その一方で「木育」という言葉が胎動し、単なる木材生産の場としての「森」ではなく、教育の場として「森」を生かすことができないか、という森の新たな価値を模索しはじめた時代でもあります。ですので、最初から理解を得られることはなく、当時は「こんなのは森づくりとは言わない」と批判を受けながらも、多くの方の協力と理解をいただきながら活動を展開してきました。次第に森のようちえんという活動が全国に広がり、その意義と効果、手法などが学術的に証明されてきたことで、苫東・和みの森での「森のようちえん」を中心とした森づくり活動も「これもありかも」と認められるようになってきました。

そこで、森のようちえんを通した森づくりを「森づくりの手法のひとつ」として取りまとめ、各地で展開されつつある幼児や保護者を巻き込んだ森づくり活動に活かすためのヒントになればと考え、本書を作成しました。

本書を作成するにあたり、全国各地から森のようちえん実践者や研究者に苫東・和みの森にお越しいただき、実際の活動の様子を視察していただいたり、現地で本人に活動を展開していただきました。そこから見えてきた知見の抽出、あるいは最低限これだけは理解し、身に付けておいた方が良くと思われるコツ、そして何よりも「森のようちえんとは何か」「幼児とは」というそもそも論など、これから各地で森のようちえんを実施しようとしている現場スタッフに対する指針・道しるべとなるような入門的な項目を並べました。

しかし本書は、これまで各地で行われている森のようちえんの手法や理念、あるいは「こうでなければならぬ」と既存の手法を否定し、覆すものではありません。本書による情報提供を通して、数ある手法の「one of them」としてそれぞれの実施主体による活動がより良いものとなる、あるいは自分たちの思いや技術を整理し、習得するきっかけとなってくれればと思います。

いま日本には素晴らしい森のようちえんがたくさんあります。私たちはそんな子どもたちのすばらしい育ちの場が、森づくりという現場から日本中に広がることを夢見ています。そして、本書の発刊を通して、優れた実践者の輩出と実践そのものを支える一助となることを願っています。



第1章 森のようちえんとは

(1) 世界の森のようちえん・日本の森のようちえん

デンマークの一人のお母さんが自分の子どもたちと近所の子どもたちを連れて森へいったことから「森の幼稚園」が始まったと言われています。

ここでは世界での森のようちえんの広がりや日本の森のようちえんの成り立ちをなぞり、「森のようちえん」について捉えていきたいと思えます。

世界の森のようちえん

一人のお母さんから始まった「森の幼稚園」は、保護者たちの自主的な活動としてデンマーク国内に幼児教育施設として広がっていきました。

その後、戦後のドイツでも森の幼稚園が増え、その他スイスやイギリスなどヨーロッパに広く広がりました。また、スウェーデンの“ムッレ教育”も「森の幼稚園」と呼び、環境教育をベースとした活動を行なっています。

2000年前後になると世界各国に更に広がっていきました。アジア諸国では、韓国が国の施設として公立の森のようちえんの設立が増え、近年では中国でも関心が高まっています。カナダやアメリカでは自然学校（Nature School）の中での乳幼児を対象とした活動が多く見られるようです。

日本の森のようちえん

日本で「森のようちえん」の名前が聞かれ始めたのは、1995年に出版された石亀泰郎氏著「さあ森のようちえんへ」によってデンマークの森の幼稚園が紹介された頃のようなようです。しかし、「森のようちえん」という言葉は使っていなかったものの、「青空保育」「野外保育」「里山保育」という自然の中での活動は、昔から存在していました。

2005年に宮城県栗駒高原にて第1回森のようちえん全国フォーラムが開催され、このフォーラムをきっかけに、全国の「森のようちえん」に興味を持つ人たちが繋がり、2008年に任意団体森のようちえん全国ネットワークが設立されました。（2016年現NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟設立）

各国で広がる「森の幼稚園」は、社会情勢や自然環境、そして文化の違いにより様々な形態や手法を取られておりますが、多くの国でデンマークの森の幼稚園を参考にしているようです。

日本では、“幼稚園”をひらがな表記にし、乳児・幼少期を対象とした自然体験活動の総称としています。活動場所も、森と限定せず、河川や海辺、緑地公園など広義的に捉えています。

また2005年以降世界的に「持続可能な開発のための教育」（ESD）への取り組みを進めており、ドイツでは幼児期における新しいESDの取り組みとして森のようちえんが提案されました。日本の森のようちえんの活動をドイツ・韓国・中国などで情報提供するようにもなっています。

そして国内でも、長野県は信州型自然保育認定登録制度、鳥取県は森のようちえん認証制度の創設に続き、広島県、三重県などその他の自治体が追随し、森のようちえんに自治体の支援が入るようになりました。更に森のようちえんの活動を認めてもらい、子どもたちの豊かな自然体験活動の推進に向けて、社会的な認知度の向上に努めておりますが、まだ道半ばなのが現状です。

(2) 日本の森のようちえんの特徴

世界各国の広がり比べると、日本では独自の特色ある森のようちえんが広がっています。一言に「森のようちえん」と言っても、人に与える印象は様々です。

日本の森のようちえんは、地域性を生かして独自の形で設立され、発展してきました。日本の自然を生かした伝統・文化や地域の食や暮らしに関わる里山文化が多く組み込まれていることが北欧の森のようちえんと違う点として挙げられます。

“森”の定義を“自然”と広義に捉え、森や海・川などの自然環境だけでなく田畑での農的な活動、各地域の文化や暮らしが活動の中に色濃く出ています。これは、昔から自然と共生して来た文化により、日本人が潜在的に抱いている自然への畏敬の念や自然物の神仏化などが、自然の捉え方や関わりに影響しているのだと思われます。

日本では、森のようちえん活動を子育て・保育・教育の一つの手法や考え方として捉えています。その手法・考え方を行うに当たって、後述の「活動の中で大切にしている3つのこと」、そして「森のようちえんを通して目指している3つのこと」は、大切な軸です。

○活動の中で大切にしている3つのこと

1. いっぱい遊ぶ 自然の中で、仲間と遊び、心と体のバランスのとれた発達を促す
2. 自然を感じる 自然の中でたくさんの不思議と出会い、豊かな感性を育む
3. 自分で考える 子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる雰囲気をつくる

○森のようちえんを通して目指している3つのこと

1. 自然の中で、子ども、親、保育者が、共に育ちあうこと
2. 自然の営みに合わせること
3. 保育や福祉の仕組みを理解し、日本の保育や子育て全体に貢献すること



活動が、日常的な活動と単発開催や行事などの非日常的な活動では、それぞれの特徴や効果の違いなどが以下のように見られます。

	日常的な活動	単発開催や行事などの非日常的な活動
活動の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・連続性のある活動がしやすい ・連続した関わりが可能 ・自発的な活動がしやすい（子ども自身で見通しが立てやすい） ・プロセスが見えやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な活動として役割が強い ・普段とは違う環境で過ごす余暇活動としての位置付け ・プログラムとして計画されることが多い
見られる効果	<ul style="list-style-type: none"> ・情緒的な育ち ・身体バランスの獲得 ・自然の変化から多様な感性 ・協働、協力の姿が生まれる ・思考力が高まる 	<ul style="list-style-type: none"> ・インパクトがあり、成長変化を促す ・普段できないチャレンジが生まれる ・発散の場となる ・個性を発揮しやすい ・単発だからこそその新鮮な発見がある

日本の森のようちえんの形態と運営主体、特徴や効果などについては、以下（表）を参照して下さい。

分類	運営主体	活動頻度	参加者
日常型	<ul style="list-style-type: none"> ・主宰者（団体や個人保育者） ・幼稚園や保育園、こども園、認可外保育等またはそれと同等の形態で運営 	ほぼ毎日	子どものみ預かり ※各団体や組織に所属する参加者
自主保育型	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者グループ ・子育てサークル等 	週1程度～毎日	親子で参加 ※預け合いをすることもある
共同保育型	保育者と保護者の共同運営	ほぼ毎日	子どものみ預かり ※当番制で保護者も保育に入ることもある
自然学校型	自然学校や野外活動団体、青少年施設など	不定期及び長期休暇 週末開催や週1程度	子どものみ参加 親子参加など様々
単発開催型	<ul style="list-style-type: none"> ・自然学校や野外活動団体、青少年施設など ・幼稚園、保育園の園外保育や親子遠足など 	年1回～月1回程度 季節により開催 行事として開催	子どものみ参加 親子で参加もある ※単発で参加者を募集の場合もある

(3) なぜ森なのか

その1 森のとらえ方～自然はどういう環境か～

森のようちえんの「森」という言葉を、皆さんはどのような考えや思想でとらえているでしょうか？ここでは思想的・哲学的な視点から、森や自然にはどんなとらえ方があるかを「多様性と変化」「生命と死」「物質を構成する四元素」「自然のリズム・人間のリズム」という4つの視点から整理してみます。



「多様性と変化」

幼い頃に自然に触れて育った人は、自然という言葉を知ると快・不快の感覚や、喜び、悔しさ、楽しみ、辛さなどの感情が同時に湧き起こることでしょう。それは、私たちにとって言葉が自然の中で見たことや聞いたこと、感じたことなど「経験」と結びついているからです。“雨”という言葉を知ると、濡れた経験や寒さ、匂いなどが同時に想起されます。言葉そのものではなく、経験と言葉とが結びついて“意味”として記憶されているのです。そしてそれは、人によって経験が違っただけに、多様な意味を生み出すところが興味深いところです。

いずれにせよ、私たちはこの“意味”をまとう本物の自然の中こそが、子どもたちが育つ環境として最も優れていると考えています。

自然界にあるものは皆、一つ一つが異なります。形だけではなく、手触り、重さ、色、温度、かたさ、など様々な要素がすべて異なります。そんな多様な物質が複雑に組み合わせられて、自然というひとつの世界を作り出しています。自然の中で子どもたちの遊び道具となるのは、そのような自然の多様性と変化から生み出される、木の枝や石ころ、樹皮、草、花、土、砂、泥、水、昆虫などです。一つ一つ異なるこれら自然物を、手に取り、見て、遊ぶうちに、子どもたちは多様性と変化に対する想像と創造の世界へといざなわれていきます。

そして、多少の変化であれば、自分の手で起こすことができますが、大抵自然の中での変化は人間の意図を超えたところで生まれます。予想もしないことや、思い通りにならないことが起き、その都度、臨機応変に対応することが必要になります。一方、いつもの“めぐり”に合わせてやってくる不快を予測して、快に変えるための手立てを、子どもたちが講じることができるのも自然環境です。自然のめぐりは、子どもたちの予測を決して裏切らないからです。

「生命と死」

自然の中で私たちがまず目にするものは生命です。緑の葉が風にそよぎ、鳥が羽ばたいている姿は、こちらが注意していなくても目に飛び込んでくるものです。昆虫や動物、植物など生物としての生命は、時を追うごとに成長し、変化しています。季節によって、生物の有り様は変化し、出会う生き物も変わります。

生命に溢れる自然の足元には、死が転がっています。それは自然界では当たり前のように存在している、ありきたりな光景です。力尽きたセミの死骸にアリが群がっていたり、鳥やタヌキやモグラの死骸が転がっていることもあります。子どもたちの手の中では、日常的に、バッタやアオムシが死んでいきます。アリのように死んだ虫を食べる生き物もいれば、トカゲやカエルのように生きている虫を食べる生き物もいます。ミミズやダンゴムシは枯れ葉を分解して土にしていきます。食べるという行為を通して、次の命の栄養になっていくことが当たり前のように繰り返されていて、子どもたちはそうした自然の営みを、当たり前のこととして受け止めます。

「物質を構成する四元素」

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは物質を構成するものとして、「火、空気（風）、水、土」の四つの元素をあげました。これは実際の具体的なものを指すのではなく、物質の様相を示す概念的なものを意味します。それぞれに対応する性質があり、古代の哲学者はそれらを用いてこの世界を理解しようとしていました。これらをさらに分類する性質として、「熱、冷、湿、乾」があります。

子どもたちはまだ、概念的な理解ができる成長段階にありません。その代わりに、アリストテレスが四元素で世界を理解しようとしたように、子どもたちは全身をつかってこれらに向き合います。しかし、四元素と四性質は、現代の私たちの暮らしからは不快なものとして遠ざけられている傾向があります。幼児教育の現場でも、安全や衛生といった言葉で壁を作ってしまい、知らず知らずのうちに子どもたちから遠ざけてはいないでしょうか。これら自然を構成する要素に触れずに育つことは、不自然な育ちであると言えるでしょう。四元素と触れ合う中でも、安全と衛生を守ることはできます。そして四元素との触れ合いを通して、子どもたちは全身の感覚でこの世界を理解していくことは生き物としての必然です。

「自然のリズム・人間のリズム」

自然にはずっと変わらぬ大きな営みと小さな営みがあります。その営みとは、地球の公転に合わせて変化する季節と、自転に合わせて変化する一日によって構成されます。朝昼夜の一日の小さな営みが繰り返され、一週間になり、一か月になり、時が進んでいきます。この小さな営みの繰り返しがつながり、季節の大きな営みとなります。季節の大きな営みも、波のように繰り返していきます。

地球のどこにいるかにより、気候や地形が変わります。それは自然環境を形作る大切な要素です。場所によってそれぞれに形成された自然環境は、人間の暮らし方に大きな影響を与えます。食べ物や住まい、衣服などにその影響が表れます。古来、人間は自然の恵みを巧みに活かして生

活してきました。その土地の自然と自然の恵みに合わせて生活様式が決まり、長い時間の中で文化が築き上げられました。伝統的な物語や言い伝えには、そこで暮らす人々の知恵が詰まっています。こうして、人間は自然のリズムから自分たちの生活と文化のリズムを紡ぎあげてきました。

自然環境を子どもたちの育ちの主たる場とする森のようちえんは、この自然の変わらぬリズムを“カリキュラム”のように考え、取り入れることができます。そのリズムは人工的ではなく、子どもたちの野外生活にとって必然的なものです。そしてそこに、その土地で暮らし、築かれた文化を取り入れることもできます。それは子どもたちにとって自然と共に生きる知恵を獲得する先人たちの追体験に他なりません。

自然環境は多様な変化に富む場です。しかし、マクロな視点で見ると、秩序的であり、不変のリズムを持っています。季節の変化と共に、生と死がリズムカルに繰り返されます。この自然なリズムを取り入れた保育計画と園生活は、人間の成長の規則的で整ったリズムに共鳴します。子どもたちは不規則で不安定な状態を嫌います。自然の中でも、見通しがたち、規則的なリズムを園の生活に反映させていくことで、子どもたちの情緒は安定していくのです。

その2 森の活動で育つもの～自然特有の体験（感性的体験と冒険的体験）～

森をはじめとする自然環境の中で、特に幼児はどのような活動をしたがるのでしょうか？そして、どのような活動を共にすることが最良なのでしょうか？「遊び」にはどのような意味と要素があり、それらが子どもの何を促進するのでしょうか？人工的なものを使った遊びと、何がどう違うのでしょうか？自然の中で活動をすることで期待できることと、そこに対する考え方や留意点を整理してみます。

「自由遊び」

自由遊びは、子どもたちにとって最も重要な時間であり成長の道です。そして、自由遊びの時間は、休憩時間や休み時間ではありません。この時間は幼児期の人生の大変を占めなくてはならず、この大切な時間を削ることは子どもたちの成長を阻害し、ひいては社会の成長発展にまで影響しかねないほど重大なことでありと認識しましょう。

また、自由遊びは大人の影響を受けずに子どもたちの裁量で遊ぶことです。子どもたちは自らの内から湧き上がる興味関心に突き動かされ、さまざまな遊びを展開します。そして、“自分で遊んだ”時間の量が、今日一日の子どもたちの充足感に変わります。

子どもたちの自由遊びは、その子が今向き合うべき課題を表しているとも言えます。今理解したいことや、獲得したいことを遊び、習得していくプロセスが自由遊びです。その課題は、子どもそれぞれ違います。自然環境には、こうした子どもそれぞれの遊びのニーズを満たすだけの広さがあります。そのため、お互いの遊びが干渉されず、雰囲気も伝染しません。

また、自然の中には街中のような騒音はなく、子どもたちの集中を阻害する雑音がありません。自然の音の柔らかさの中で、子どもたち自身も騒音のような声を出す必要がなくなり、落ち着き穏やかに遊びに没頭することができます。

環境的な安全が確認できていれば、大人は子どもたちの遊びをゆったりと見ていることができ、その姿は場全体を安堵と穏やかな空気で包みます。その空気を子どもたちは体で感じ取り、自分に取り込んでいきます。子どもたちの人格を形成するのは主体的な行動が認められた自由遊びの時間と、この穏やかで平和な場の空気です。

森のようちえんにおいて、自由遊びが重要な要素であることは間違いありません。しかし、自由遊びだけでは十分とは言えません。子どもたちが何にも邪魔されず主体的に遊ぶ自由遊びは自分自身と世界を理解する重要な活動ですが、一方、大人が主導する生活活動や文化的活動には、自然環境と人間社会をつなぐという大きな意味があります。大人が主導する活動はまた、遊びを通じて子どもたちに取り込まれていきます。大人が主導する活動と自由遊びのバランスとリズムが、森のようちえんを構成する必要十分な要素となります。



「遊びの段階～ひとり・となり・ふたり・みんな～」

発達段階は、大まかに年齢で区切って表現されることが多いです。しかし、幼児にとって4月生まれと3月生まれの差が大きいように、子ども一人ひとりによって色々な違いがあります。

2歳頃	2歳までの子どもたちはお母さんと一緒の世界の中にいることで、安心して遊ぶことができます。この時期においては、お母さんと遊ぶことも、お母さんのそばで一人で遊んでいることも、同じような意味を持っています。子どもにとってお母さんは、自分の一部のようにつながっている存在です。
3～4歳頃	年少の春先、子どもたちは“一人遊び”に没頭できるようになります。自分の内から沸き起こるものに駆られて、夢中で遊びます。この一人遊びは、子どもたちの創造性を掻き立て、心を喜びで満たします。遊びを通し

	<p>て自分の体の使い方を学び習得します。そして体の隅々まで意識をいきわたらせ、自分の体と外の世界を認知するのです。</p> <p>また、自然を相手に遊ぶということは、決められた遊び方やルールがなく、すべてが自分の裁量で決められるということです。年少の子どもたちは、自然と向き合う一人遊びの時間をじっくりとすることで、創造力を働かせ、多様な感覚刺激を得て神経系を発達させ、自己認識を深め、他者理解の礎を築きます。</p> <p>年少の秋冬ごろになると、“一緒に”に没頭することができるようになります。この頃の“一緒に”は、隣にいます。隣にいて、同じ遊びをしています。例えばめいめいで泥団子を作ったり、同じお店をそれぞれが作ったりします。その遊びが年齢と共に発展していきます。年中の頃には“一緒に”が、文字通り“共に”の遊びができるようになります。少人数の小さなグループを形成して遊ぶようになり、遊びの発達と歩調を合わせて、コミュニケーション能力や社会性が発達していきます。</p>
5歳頃	<p>年長の頃には、みんなで力をあわせて一つのことに取り組むことができるようになります。これは、役割を分担して行う大きなプロジェクトになります。作業の中では、それぞれの興味と特性に合わせた役割が自然に分かれていきます。そして、今まで自然の中で獲得した心身の機能や技術があり、できることが多く、巧みになっています。一人一人の興味ややりたいことは違いますが、成し終えた後にはみんなで作ったひとつのお家が出来上がっているのです。</p> <p>3年間を自然の中で過ごした年長児は、自分の体を使いこなす運動機能をしっかりと備え、自分の体と外の世界の認知がよく発達しています。目の前にあることだけではなく、周囲に目が届くようになります。遊びグループのみんなでしていることの全体像をつかみ、その中で自分のいる位置や役割を認識することができるようになります。</p> <p>思考はより複雑になり、客観的なものの見方や全体の把握、他者の理解など、感覚的にも感情的にも精神的にも、大きな成長をみせます。その世界をもっと広げたいと願う子どもたちのために、大人が主導する活動や、意図的な環境の変化を取り入れていくには最適な時期です。</p> <p>そこで新しい道具を使うことは、世界を広げるひとつの手段になります。例えばハサミやナイフ、のこぎり、マッチなどです。これらは自然の中には無いものなので持ち込まなければなりません。人間の知恵の詰まった便利な道具です。さらに、音楽活動として本物の楽器を使ったり、絵画活動として絵筆や紙を使うこともできます。結果のよし悪しではなく、その過程そのものを全身の感覚を使って楽しむことが大切です。</p> <p>年長児はより長い距離を歩くことができます。またどんな環境でも身の周りの世話や、自分の身の安全を守ることができます。</p> <p>子どもたちの世界は大人の手によって大きく広がります。自由遊びの中で協同性が身についているため、みんなで一つのことを成し遂げるプロジェクトを行うことができます。</p>

「遊びの道具」

自然物	<p>自然の中で子どもたちが遊びに使う道具は、木の枝、樹皮、草花、木の実、葉っぱ、砂、泥、水などです。自然のものは手触り、色、匂い、柔らかい・固い、温かい・冷たい、などあらゆる感覚的な部分が異なります。それを手でつかみ、遊びの道具にします。すると、多様な感覚刺激が手から脳へと伝わり、脳を活性化させます。生きているものは、手の中で動きまわり、また死ぬこともあります。草花は徐々にしおれていき、水につけると生き生きとすることが分かります。子どもたちは生き物を取り扱った遊びに没頭するうちに想像力が広がっていきます。</p>
刃物や調理道具	<p>活動で使う道具は本物を使います。調理に使う包丁、木を切るナイフやのこぎり、農機具など、大人が使うものと同じ材質でできた本当のものを使わせます。こうすることで子どもたちは、その活動の本質を、感覚を使って理解することができます。</p> <p>年少児がこうした刃物を使う時は、大人と一緒にサポートします。しっかりと手をかけ、目をかける必要があります。</p> <p>子どもたちにナイフやのこぎり、包丁を使わせるかどうかは、子どもたちの身体感覚の発達段階と大きく関係します。刃物を使うことには大きなケガをする危険とその可能性が伴います。運動機能が発達した段階の子どもがするケガと、そうではない子どもがするケガには教育上の意味が異なります。前者はより注意深くなり、自己コントロールや刃物の扱いを習得するために必要なものです。後者は、子どもが未発達な段階のため、大きな事故につながります。</p> <p>刃物を使いながら身に着ける力よりもはるか前に身に着けるべき別の力があることを理解しておく必要があります。刃物を使う時には大人と一緒にいるなどの“やくそく”が必要になります。傷が深くなればケガではなく事故になり、教育上の意義は失われてしまうことに注意すべきです。私たちは子どもたちが主体的に動けるような環境をつくりませんが、同時にそこでは事故を防ぐ義務があります。</p>



「冒険あそび～危険を伴うあそび～」

自然の中で子どもたちは、木に登ったり、崖にのぼって滑って降りてきたり、草の坂を走り降りてきたり、転げ落ちてきたりします。重力に身を任せたり、風を感じたりすることは、自分の体と外の世界を理解する子どもたちなりのやり方です。

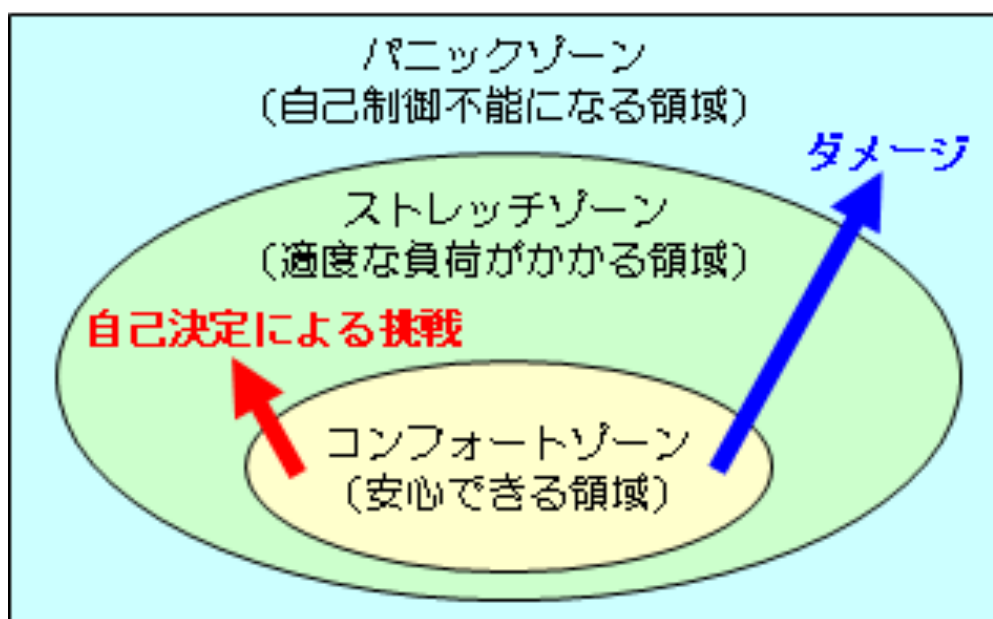
自分がいつもいる場所から高い所へいくことでは、高揚感や爽快感と不安や恐怖のはざまに立ち、揺れる心を感じることができます。心臓がドキドキしたり、足がすくむのを感じます。溝に枝で橋をかけて、そろりそろりとわたっていく子もいます。こちらも同じようなドキドキを味わっていることでしょう。その瞬間が「冒険」と表現されます。

こうした冒険には失敗がつきものです。うまくいかない時には橋を補強したりして工夫をします。高揚感や爽快感よりも恐怖心が勝ると、この挑戦は“今日はここまで”になります。

子どもたちには十分な時間があるはずですが、今日できなかったことやあきらめたことでも、また明日、同じ場所で再挑戦する機会が保障されるべきです。

どんなチャレンジも、自分のモチベーションと力でやるのが大切です。結果ではなくチャレンジすることそれ自体に成長のきっかけがあります。手助けを借りずに自分の力で達成したときに味わう達成感はひとしおですが、それを味わうためには十分な時間が必要です。

冒険的な遊びには、チャレンジがつきものです。その一歩踏み出すチャレンジによって、子どもたちは不安や恐怖とたたかいます。それを乗り越えることで新しい世界に到達し、喜びや達成感を得ます。このような経験は自己肯定感に変わり、さらに新しい世界を広げていこうという意欲に変わります。小さい時から遊びを通じて、小さなチャレンジを繰り返し、挫折と喜びの両方を、何度も何度も味わうことは、子どもたちの世界を広げ、ゆっくりと大きく成長させてくれます。そして、心の中の不安や恐怖、葛藤にしっかりと向き合う力や、それを乗り越えていく意欲や自信が身につきます。子どもたちが大きくなった時、向き合う壁はより大きくなっていきます。人間関係の問題や、環境の大きな変化、社会的な挫折、そして災害が起きることもあります。それまでに遊びや野外生活を通じて、小さな壁にしっかりと、自分の力で、向き合い乗り越えてきた経験が、その時にきっと役に立つのです。



冒険教育における3つの領域

その3 自然と共に生きる

かつて、人は自然を「制圧」「コントロール」の対象として捉えていました。

自分の生活や命を脅かし、奪ってしまう自然の脅威に対し、それをどう制御するのが人類の命題でありました。その挑戦から生まれた技術やシステムは、多くの人々の命と糧を守ることとなった一方、自然の恩恵からの乖離を引き起こすこととなり、それは人々の身体のみならずその心の崩壊をも招くこととなってしまいました。そんな時代であるからこそ、「共に生きる」方法の一つとして森のようちえんが注目されてきた、という側面もあります。「共に生きる」「共に暮らす」というあり方はどういうことなのか、整理をしてみようと思います。

自然の恵み	森のようちえんの一年の保育計画を考えるにあたっては、自然の流れに沿って、自然に密着した文化や暮らしを取り入れていくことで、その土地での自然のリズムを活かした計画をつくることができます。
農	自然の流れに従い作物を育てる“農”も、自然と共に暮らす知恵のひとつです。畑や田んぼには森にはない自然環境があり、なかなか出会えない生き物や、なかなか普段は感じるできない感覚を経験します。特に日本では、農的景観や里山の景観など、ある程度人の手が入り込んだ環境も自然を構成する一つとして考える理念があります。
手仕事	現代ではほとんどのモノは買うことで手に入れるようになっていきます。しかし自分の生活に必要なものはほとんど手作りできるものです。私たちはその“作る”という手間と時間を、お金で買っているに過ぎません。手で作るということは、子どもたちの遊びの中でよく行われている行為です。それを生活に結び付けていくことは、子どもたちの喜びに変わります。遊びと生活が循環するのです。
食文化	人の手を入れることで、自然の恵みは姿を変えていきます。暮らしの知恵の詰まった食の文化は、土地と環境によって大きく異なり、その自然と気候に合ったものが発達しています。また、食べるという行動は、その場所と自分を直結させて考えるには一番わかりやすく、普遍的ですらあると言えます。
天候、季節	自然の中には季節があります。それぞれの季節には特徴があり、連続的に変化します。ある日から急に夏になったり、季節が戻ったりすることはありません。子どもたちは経験を基にして、次に廻る季節を予測し、準備することができます。また、その繰り返しをもとに「快適に過ごす」という技と予測を身につけます。天候や季節とうまく付き合って生きる、という経験は、人間がどうにもコントロールすることができないものを肯定的に捉える第一歩かもしれません。

森での生活	自然の中での活動は、つまりはほぼ直角や直線のない世界での活動である、ということもできます。目に入る全ての角度や色づかい、持った時に感じられる見た目とは違う質量、コントロールされた空気ではない、言葉では言い表せないあの空気感、湿度感。森の中での生活は、普段以上に多くの刺激を受けるので、実はかなり身体的な負担が大きく、実はとても疲れます。その疲れが、子どもたちにとっては心地よい睡眠を誘引し、良い生活リズムが生まれます。
服装	野外生活には適した服装があります。日本の多様な自然環境に合わせて、子どもたちの服装を選ぶ必要があります。野外生活では小さなケガはつきものですが、大きなケガは事故となり、子どもたちの幸せにはつながりません。子どもたちの感覚刺激を多様にしつつ、身を守ることとのバランスをとる必要があります。
持ち物	子どもたちの持ち物は野外生活に必要なものです。これらを自分で管理し、自分で持つことで自己管理の裁量と自由度をあげ、「自分のことを自分でする」という自立心につながります。持ち物は過剰な刺激にならないようにシンプルなもの（色柄・機能・においなど）を用意し、子どもたち自身で持ち使えるように工夫します。また、過度な装備品を持たないようにして、自然のものと限られたもので工夫する環境を作ります。
家庭生活	子どもたちにとっては、ようちえんに通うことと、家庭で過ごすことが毎日のリズムになり、それが一定に保たれることが必要です。繰り返すパターンになることによって、見通しがつき、安心して環境に身を任せ遊びに没頭することができるようになります。そのため、非日常的な一過性の体験ではなく、日常的に自然の中へ出かけるように意識するべきです。いわゆるルーティーンワークとして自然体験を位置付けることこそが、森のようちえん最大の目標でもあります。



(4) これからの時代と森のようちえんの役割

過去 30 年間を振り返ると社会は大きな進化を遂げ、生活様式も変化し、地球環境の危機が叫ばれるようになりました。この激変の時代に必要な人材とは、一体どんな人材なのでしょう？

社会、経済、環境など様々な分野で急速に変化している今。古い価値観から新しい価値観へと変化していく過程であるこの時代は、不確実で複雑、曖昧です。その時代を生きていけないといけない子どもたち。そんな子たちに必要な能力は、知識や数字で測れる認知能力よりも、数値では測ることのできない非認知能力である、とされています。

豊かな発想を持ち、人との繋がりながらグループワークで何かを創り出す力。

好奇心や探究心、向上心を持ち、自分の力を社会に活かそうとする姿勢。

そして逆境に負けない心の逞しさや困難に立ち向かう力。

これらが、これからの時代を生き抜く人に求められる能力です。そしてこれらは、幼児期から育まれることが必要であり、幼児期にこそ最も育まれる能力でもあります。森のようちえんは、葛藤の多い自然環境の中で、子どもたちの自ら育つ力を信じ、見守り、主体性を尊重しながら、活動を展開していくことがやりやすい状況にあるので、前述のような今の時代に必要な資質や能力が、乳幼児期より育まれて行く場である、ということができるでしょう。

また、自然体験が乏しくなっている今の社会、自然に触れる機会を持ち、地球環境について考えられる人に育むことも大切です。日々の自然との触れ合いから、地球環境の危機を肌で感じ、真剣に取り組んでいく姿勢が育まれるのが森のようちえんの特徴ではないでしょうか。

個人の幸せから集団（社会）の幸せへの新しい価値観を創造しながら、人々や利益、地球、平和の持続可能性を目指し、課題に向かう人材を育成していくことが、今、世界の教育の目標です。その一端を担っている「森のようちえん」は、自然から受ける影響を抛り所としながら、“自分”という個を確立し、人々と繋がり、協力し、新しい社会を創っていく人材を育てているのです。

